朝

堀田　素生

朝。気怠さと眠気と憂鬱の時間帯。夢から覚めて、この世界と再会したばかりだというのに、私はいつも目覚めの瞬間は世界を愛せない。大音量のアラームに意識を否応なくこじ開けられるような、心の底から泣き叫んで抗議したくなるような、不快の極致。人間の脳には睡眠慣性と言って、一度睡眠に入ると眠りを維持しようとする働きがあるらしく、つまり目覚ましを鳴らして無理矢理に起床するというのは私にとってだけでなく、誰にとってもつらく苦しい戦いであるということがわかる。

朝には毎日繰り返される決まった風景というものがある。人間社会は時間によって管理・維持されているからだ。私達はたいてい、何年も学校に通わなければならないし、何十年も職場に通わなければならない。長期間に渡る同じことの繰り返しは、人間にとって多くの場合苦痛なものだ。そのことは例えば日本古来の有名な俗信である「賽の河原の石積み」にも現れている。

ところで私は、朝シャワーを浴びて出かける支度をする間に、ほとんど毎日窓の外からギャギャギャギャギャギャン！と、犬が吠え狂う声を聞く。その後に決まって続く「あらあら、すみません」という飼い主の声から、散歩中の犬が別の犬を見つけて昂奮しているのだとわかる。つい先日、いつもより早く出かけた際に、家の前でまさしくその光景に出くわすことになった。家を出て駅に向かって歩き始めた所で、目の前の角からチョコレートのような色をした小さなダックスフンドが走ってこちらに近づいて来た。多分だがチョコとかココアとかそういう名前なんだろう。こちらに何の用かと思えば、ダックスフンドは私の真横を素通りし、飼い主を引きずりながら一目散に目標物に向かって駆けて行く。カッと見開いた目の見つめる先は、一寸の狂いもなく私の後ろに位置する対象にロックオンされている。間もなく背後からギャギャギャワワギャン！と昂り切った吠え声が聞こえ、思わず振り向くとダックスフンドが自分よりも大きいコーギーに飛びかかっていた。

「あら、あらら・・・」と慌てふためきながら、飼

い主の中年女性が一生懸命リードを引いて、コーギーから引き離そうとしていた。もしかしてあの犬だったのか、いつも私の家の前でけたたましく吠えていた犬は。朝の道ではよく散歩中の犬に出会う。この近所にはとりわけマルチーズやシーズーを連れている高齢の女性が多い。ペットは飼い主に似るというが、マルチーズやシーズーは本当に顔つきが高齢女性そのものである。どの個体を見ても大体そうなので、元々そういう顔つきの犬種なのかも知れない。この場合犬が飼い主に似るのか、飼い主が犬に似るのかは定かではない。

しかし、犬を飼っている人には本当に頭が下がる。毎朝毎朝、休みも平日も関係なく決まった時間に散歩に連れて行ってるのだ。しかしそれも、可愛い飼い犬のためなら苦にならないと考える人もいるかも知れない。それはその人が自ら選び取った幸福なのだろう。起床することを社会から強制されない限り、私は自分が納得行くまで眠る。休みの日はいつもより多く昏々と眠ってしまう。起きている間よりも眠っている間のほうが楽しいかも知れないとすら思う時もある。朝起きて、支度をして、電車に乗って職場に行く。この繰り返しは私にとって、到底楽しいものとは言えない。

待ちに待った休日に目が覚めると、私は決まってカフェオレを淹れて、イマジナリーフレンドの恋人と飲む。これは私が定めている朝にまつわる決まり事の一つで、休日に繰り返されるゆるやかな風景だ。社会から強制されたものでもなく、自ら決めて実行している。同じことの繰り返しは、しばしば人間に退屈を感じさせるが、幸福な繰り返しというものもある。まるでそれは心地よい音楽が繰り返しずっと聴こえるかのようだ。社会に縛られるのは苦しいが、自分で選んだ幸福に縛り付けられることは、生を意義のあるものにしてくれる。その繰り返しがもしもいつか失われた時、私はその愛おしさを噛み締めるだろう。

（２０２１年、年の瀬の暖かい部屋にて）